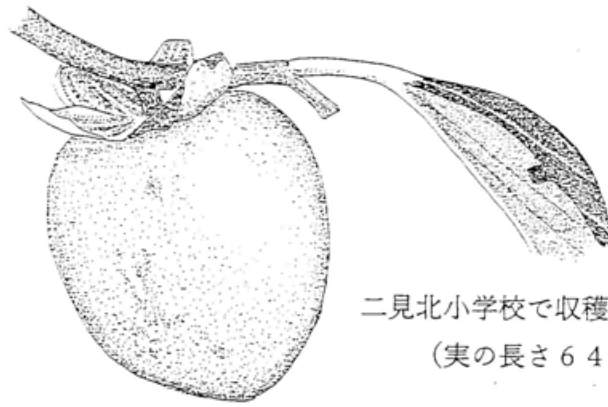


はり ま たん けん  
播 磨 探 検

2017. 11. 14 278号  
え 文 赤 松 弘 一



二見北小学校で収穫した渋柿  
(実の長さ64mm)



十一月十二日に試食した所、完全に渋が抜けていた。

秋になると美しく色づいたカキの実が目につく。郊外の里山のみならず街中でも道端や公園、民家の庭にたわわに実っているのを見かける。誰も食べないのか熟して落ちるに任せているものが多い。

「昔は戦争があって食べるものがなくて大変だった」という話を親の世代から聞かされたが、当時はカキも重要な食料として残らず食い尽されたのだろうか。今、何か政変があって輸入が止まると、日本はたちまち食糧難になるが、秋ならカキだけは手に入りそうだ。

中学生の時、友人の家の隣にうまさうなカキがなっていた。無許可で一つもぎ取って、ためらい無くカブリついた。「甘いな」と思ったのは1秒足らず、すぐに口中が土を詰め込まれたように感覚がマヒしたようになってしまった。世の中そんなに甘くないということを教えてくれた凶暴な渋柿だった。

二見北小の西のフェンス沿いにカキの樹1本あり、たくさんの実が色づいている。このカキは渋柿だということである。台風が週末ごとにやってきて、実を落とさないか気をもませたが、22号が通り過ぎた10月30日に、まだ青味の残る少し硬い実を収穫した。翌日早速「干し柿製造大作戦」を開始した。といっても皮をむいて麻ひもに吊るし、アルコールを噴霧して消毒しただけである。陰干しして2日後、表面が乾いたところで手でもむ。こうすると柔らかくておいしい干し柿になるらしい。カキが渋いのは実に含まれるタンニンという成分が関係している。これが食べたときに口内の粘膜のたんぱく質に結合し、感覚神経をマヒさせ「あわわ、ひびらった(渋だった)」となる。甘ガキにもタンニンが含まれているが、これは水に不溶性で口中のたんぱく質と結合しないため食べても渋くないらしい。渋柿を干すことで水溶性のタンニンが不溶性となり、渋みを感じずに甘く食べることができるのだ。

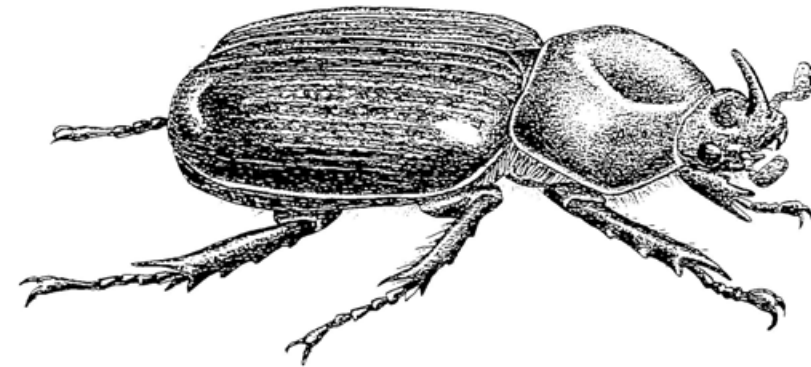
カキは未熟な時にはこの渋みで動物に食べられるのを防ぎ、完熟すると渋みが抜けて甘くなり、動物に食べてもらい種子を運んでもらうのだ。熟したカキの種の周りがあるゼリー状の組織は食べたときに種がかみつぶされないように滑りやすくし、動物に飲み込まれやすくしているらしい。干し柿を考えた人間も偉いが、カキの知恵も相当なものだ。

我家の庭の隅には一昨年に二見西小学校で採ったカキ(甘ガキだった)の種を捨てていたのが芽吹き、70cmほどに成長している。(桃栗三年柿八年…甘いカキが実るのはまだまだ先だ)

カキは東アジアの原産で、江戸時代に日本からヨーロッパやアメリカに伝わったため、学名も Kaki となっている。

肉食甲虫逃亡！ 搜索難航中…

コカブトムシ (コガネムシ科) *Eophileurus chinensis chinensis* 体長 24 mm



オスには頭部に小さな突起と前胸部に大きなくぼみがある。身体はやや扁平である。

秋になると私は忙しい。9月末に嬉野台でヌメリイグチなどのキノコをこっそり採取し、みそ汁に入れて食べ、10月に入ると加古川市の平荘湖の遊歩道で、アケビを20個ほど密かに収穫し、おいしくいただいた。次は干し柿作製のための柿をどこかで内緒で入手する計画である。そして11月末には人知れず山芋を掘らねばならない。秋の里山は実り豊かなのである。

10月9日の午後、私は明石公園を探索していた。秋雨と高めの気温で、多くのキノコが顔を出しているのではないかと期待したが、めぼしい収穫はなかった。夏の虫はすっかり姿を消し、さくら掘り沿いの小道はひっそりとしていた。ふとそばの石垣の上で小さな黒い甲虫(コウチュウ)がぼんやりしているのに出会った。それはコカブトムシであった。これまで明石公園ではよく見つけているが、他の地域で出会ったことはなく、割合珍しい虫なのである。コカブトムシはカブトムシの仲間ということだが、オスの頭に小さなツノがあるという点を除くと、あまり共通性はないように思う。幼虫は腐朽材の中で育つらしいが、成虫は死んだ昆虫や幼虫を食べる肉食性であり、カブトムシのように樹液には集まらない。幼虫の成長が速く、2か月ほどで成虫になるため、夏の間は2~3回ほど発生を繰り返すらしい。冬越しは成虫の状態で行うようだ。真っ黒で、やや扁平な体つきは、シデムシの仲間のように見える。また頭のツノや前胸部のくぼみ、太くてのこぎりのようにギザギザのついた前脚はセンチコガネなどの糞虫のようでもある。今回見つけた個体は頭のツノが、これまで見つけたものより大きくてかっこ良く尖っており、「絵に描いてみたい」と思わせるナイスガイであった。そこで取り出したフィルムケース(なぜか持っている)に入っていた。

1週間後の休日に私は寝室兼作業部屋の机の上で、朝からコカブトムシの絵を描いていた。おおよそ描き終えて、夕飯のために階下へ降りて行った。再び机に戻った私はコカブトを入れていたプラスチックのケースを見て、おののいた。「いない！」ふたをきちんと開けていなかったため逃げ出したらしい。「まだそう遠くには行っていないはずだ！」昔のドラマの刑事のようにつぶやき、辺りを探したが見つからない。絵はほとんど仕上がっているので問題ないが、ここは我家の寝室でもあるので、虫が逃げたまま行方不明になっているという事実は非常にマズイ。かつてこの部屋では、やはり絵を描いている途中での逃亡事件が何度か発生している。カタツムリ、テントウムシ、ゾウムシなどがいまだに行方不明のままになっている。以前、紙箱に入れて玄関においていたコウモリの子供が脱走し、やはり行方不明になっている。

「あの虫は逃がしてあげたの？」と妻に聞かれること、さらには布団の下からコカブトの死骸が出てくることを怖れながら、平静を装って暮らしている。